平成２８年度　学校評価　自己評価書

あま市立秋竹小学校

１　総　　括

(1)　教育目標（学校経営案より）

学習指導要領の基本理念をふまえ、児童のすぐれた個性を伸ばし、個を生かす教育活動を通して、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成を図る。

＜めざす児童像＞
- ○　強　く　　自他の生命を大切にし、たくましく生き抜く子
- ○　正しく　　自ら学び、正しく判断できる子
- ○　明るく　　礼儀正しく、心豊かで思いやりの心をもった子

(2)　本年度の重点努力目標

ア　学ぶ力を高めるため、基礎・基本の確実な定着をめざし、「わかる授業」「楽しい授業」を心がける。さらに、体験的な学習、問題解決的な学習を重視し、個に応じた指導を大切にする。また、その過程を通してコミュニケーション能力を高める指導を工夫する。

イ　異年齢集団「なかま」活動により、思いやりの心や感謝の心を育てる。また、「読書の時間」の充実のために「読み聞かせ」を職員とボランティアで積極的に行う。

ウ　外遊びを推奨し、体育的行事を計画的に実施するとともに、家庭の協力を得ながら正しい生活リズムづくりをはじめ基本的な生活習慣の育成に努める。

エ　「あいさつ運動」をはじめ、諸行事を通して教師が児童に寄り添う中で、児童理解を深め、心のつながりを大切にした学級・学校づくりに取り組む

オ　定期的な安全点検以外にも、遊具の安全な使用方法や廊下歩行の安全指導など、安全な学校環境づくりに努める。対応マニュアルを常に見直し、避難訓練を行う。

カ　学校評価や個人懇談の実施、ホームページの更新、学校通信の発行、外部講師の招聘・行事へのＰＴＡ協力等を通して、学校を地域に開き、家庭・地域との信頼関係づくりに努める。

２　自己評価の実施体制

(1)　調査時期　平成２８年１２月１日～１４日

(2)　調査項目　別紙アンケート参照

(3)　調査対象　有効回答者数／対象者数

・児童	１５０名／全１５２名	・学校評議員等	４名／全４名	
・保護者	１１１名／全１１９名	・教職員	１３名／１３名	計２７８名

３　調査結果

別紙アンケート結果参照

４　考　　察【児童・保護者・教職員・地域等の総括的考察】

(1)　「学校は楽しい」（児童）「わが子は、楽しそうに学校へ通っている」（保護者）の項目において、どちらも９０％程度の達成率で Ａ 評価である。１割程度の児童・保護者が、否定的な回答をしていることに留意し、その理由を探って行く必要がある。

(2)　児童・保護者・職員の共通項目で、わずかではあるが共通して肯定的な回答が増えた項目が２つある。一つは「学校の目標を知っている」で、校長講話・学級担任の取組・ホームページの充実が結果に結びついたと考えられる。もう一つは、「授業がわかりやすい」「基礎的な学力が身についている」で、児童については２年連続している。学力に関しては、保護者はもちろんのこと、教職員自身も重要視している観点である。学力向上に向けて、引き続き粘り強く取り組んでいきたい。

(3)　決められた仕事（当番・係）をきちんとしている」で、「全くあてはまらない」と答える児童が０％になった。自分の役割を果たすことは、居場所があり自己肯定感が高まることにもつながると考える。児童の、自己の役割に対する責任感や規範意識の高さと、それを支える教職員の熱意が伺える。

(4)　保護者の評価で昨年度に比べより肯定的評価が一番増えた項目は、「学年通信や各種た

よりで、学校の様子はおおむねわかる」で、学年だよりの発行回数が増えたことや、ホームページの頻繁な更新を行ったためと考えられる。ホームページのアクセス数は月平均２０００程度あり、家庭数から言うと、半数程度の家庭が毎日閲覧していることになることも、その要因と考えられる。

(5)　「困ったことがあったとき、相談できる人がいる」（児童）「子どもの学習や生活について、担任や他の教職員に相談できる」（保護者）の項目において、高学年児童で肯定的な回答の割合が減っている。このことは、児童間で起きた問題が、保護者からの相談で明らかになることが多いことからも、実情を反映していると言える。これは、学校教育を進めていく上での基礎である保護者・児童の職員への信頼に関わる問題であるので、十分な検討が必要である。

５　成果と課題

＜成果＞

(1)　「学校の様子がおおむねわかる」とする保護者が９４％になり、Ｄ評価ながらも「本年度の学校重点目標を知っている」とする保護者の割合が増えたことは、家庭や地域の連携を強化するために、学校の教育活動や学校としての重点的な取り組みについて、家庭や地域に積極的に発信してきた成果であるといえる。

(2)　「学校は楽しい」と答える児童や保護者は９割を上回っており、本校の伝統的な「なかま活動」により、どの学年の児童も、達成感や充実感を味わうことで生き生きとした学校生活を送っていることが伺われる。また「仕事をきちんとする」「ルールを守る」という児童が多いということは、好ましい学級経営が行われている結果であり、児童一人一人が互いに信頼しながら日々の活動に取り組んでいると捉えることができる。

＜課題＞

(1)　より多くの児童や保護者が困ったことがあったとき、すぐに相談できる相手が学校であるいえるような信頼関係を築くこと。

(2)　大部分の児童は学校生活を楽しみ、仲良く生活しているが、中・高学年の児童に否定的な回答が見られたので、どの児童にも居場所・活躍の場が与えられ、自己肯定感をもてるようにしていくこと。

(3)　どの児童も円滑な人間関係を築くことができるよう、コミュニケーション能力の向上を図ること。

(4)　児童たちの学習に対する意識は上向いているので、基礎学力の向上に努めること。

６　改善策

(1)　児童の様子を的確につかむようにするために、①個別相談の時間を充実するためのアンケートの実施する。②家庭との関係づくりに努め、児童の様子について家庭との連絡を密に行う。③問題発生時に報告・相談・必要に応じて担任のみでなくチームで対応するという意識改革及び体制作りを行う。④職員の児童・保護者の声に耳を傾け寄り添う姿勢についての研修を行う。

(2)　心の教育の充実

道徳の時間を充実させ、他の教科・領域との関連を図りながら、人としてよりよく生きようとする姿勢を育む。そこで養った「道徳性」が実生活でも活かされるよう、特別活動の内容を工夫する。また、なかま活動を通して人間関係を築く力や社会性を育み、自己有用感をもたせる。保護者を巻き込んであいさつの励行に取り組み、生活のあらゆる場面で自分から進んであいさつできるよう習慣化を図る。

(3)　コミュニケーション能力の向上

授業を中心に、学校生活のさまざまな場面で「話す」「聞く」「話し合う」活動の場の設定を工夫し、「自分の思いを的確に伝え、相手の思いを共感的に受け止める」という伝え合う力の向上をめざす。

(4)　基礎学力の向上

学習規範について全校同一歩調で指導を行い、どの学年も落ち着いた態度で授業が進められるように努める。また、児童一人一人の実態に応じて、より効果的に支援することができるよう、ＴＴによる指導や教育支援員の配置する。ユニバーサルデザインを取り入れた教育のさらなる導入やＩＣＴ機器の活用などにより、どの子もわかる授業をめざす。また、教員の授業力向上のための研修を計画的に進める。